

「施設実習での指導に関する意識調査」

— 実習指導者から見た実習生の課題 —

岩本 義浩¹⁾ 中島 たまみ²⁾
松永 繁²⁾ 黒木 豊域²⁾

¹⁾ 職業教育研究開発センター客員研究員

²⁾ 日本福祉教育専門学校

Attitude survey about instruction in facility training

Iwamoto Yoshihiro¹⁾ Nakajima Tamami²⁾
Matsunaga Shigeru²⁾ Kuroki Toyoki²⁾

¹⁾ Vocational education center of reserch and development

²⁾ Japan Welfare Education College

Abstract : 【Introduction】 About 30 years have passed since the “Social Worker and Care Worker Act” began on training for students. Therefore, the purpose of this research was to clarify the goals of students in their practical training by the perspective of practical instructors. 【Method】 The questionnaire method was carried out at anonymous arbitrary collection formula for a limited time and asked the practical training instructors to describe the difficulty, expectation and effectiveness of the guidance to the students. 【Results】 Guidance for students in variety requires individuality of the contents at practical training and a close relationship between the instructor and a faculty regarding to student’s information. In addition, an expectation value for students indicated that the practical instructors wished students experience of practical training to be meaningful opportunity for students. Finally, as effective guidance to difficult students, it was suggested that the close coordination between a teacher and psactical training instructor is necessary. 【Conclusion】 In order for students to experience meaningful practical training, they must obtain basic knowledge of manners and practical training agencies in classes. Also students must clarity and set goals before practical training. We reaffirmed that the necessity of close coordination between a teacher and practical training instructor through sharing student information to prepare the meaningful learning environment.

Key Words : diverse students, training schools, welfare training, facility instruction, cooperation

要旨 : 【はじめに】 学生に対する実習指導について「社会福祉士及び介護福祉士法」が始まり約30年経った。そこで本研究の目的は、実習指導者の視点による学生の課題を明らかにすることとした。【方法】 アンケート方法は、無記名任意回収式の有期限で行い、実習指導者らによる学生への困難性、期待度並びに指導の有効性について記述してもらった。【結果】 多様な学生の指導においては、実習内容の個別性が必要であり指導員と教員の学生情報への密な関係が必要である。また、学生への期待値に関する調査においては、実習が学生にとって意義ある機会になる様に捉えている。最後に多様な学生への有効な指導として、実習指導者と教員の連携が重要であることが示唆された。【結論】 実習生が有意義に実習を展開するためには、授業において基本的マナーや実習先を理解し、実習前に目標を掲げ学生自身の課題を明らかにする。そして、実習生の情報を通じて教員と実習指導者が連携し、指導教育の環境を整えていくことの必要性が学生の有意義な実習に繋がることを再認識した。

キーワード : 多様な学生、養成校、福祉実習、施設指導、連携

1. 背景と目的

本校において、ソーシャル・ケア学科（以下、本学科）は、2008年に4年生学科として高校を卒業した18歳からの新入学年を対象とし『4年間で、社会福祉士及び介護福祉士の2つの国家資格を取得し、実践現場をマネジメントできるリーダーを育成すること』をコンセプトに創設された¹⁾。

厚生労働省は1987年「社会福祉士及び介護福祉士法」を制定し、2007年の改正（以下、改正）及び厚生労働省告示により「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」が見直されるなど、福祉人材の円滑な確保にむけて大きな前進が見られた。

改正では、社会福祉士業務の定義の見直しや職域拡大に加えて、資質の向上を図るため、社会福祉士養成課程のカリキュラムで充実させた。また、実習施設での実習指導者となる者には、2009年度から「社会福祉士実習指導者講習会」の受講が義務づけられた。

同じく「介護福祉士実習指導者講習会」は、2014年4月より実習生の受け入れをするにあたって、本研修の受講が対象施設に義務付けられた。

これらは、社会福祉士養成並びに介護福祉士養成において、養成施設（教育機関）と実習施設は互いに協力・連携し、丁寧な実習指導体制を整え、実践力の高い人材を育てていく役割を担って行ける学生指導が求められるようになったということを意味している。2019年の現在、「社会福祉士指導者講習」から11年間、「介護福祉士指導者講習」から4年が経ち、実習指導者と養成校がそれぞれの役割と指導の位置づけの共通理解が図れてきている。

その実習教育は、社会福祉専門職養成においては教育方法の一つで、介護福祉士養成では社会福祉施設や在宅での450時間以上の介護実習が、社会福祉士、精神保健福祉士では施設、機関での180時間以上の配属実習が規定されている（社会福祉辞典（2002）²⁾）。

これらの福祉実習の目的、学びの方法については、介護福祉士用語辞典（2015）³⁾では介護福祉士養成は「介護サービスを提供している施設において施設職員の指導のもと、実際に介護を展開していく能力を身につける実習」として紹介されその実習内

容は「要介護者などとの触れ合いの中で、一人ひとりを尊重する重要性を理解し援助関係を築き、個別介護計画を通して介護上の課題を明らかにし、その解決に向けた介護過程を実施する。要介護者の関わりを記録し、自らの介護を振り返る。さらに、保健、医療、福祉領域との連携、他職種についての理解を深め、ケアチームの一員として必要な技法を学ぶ」と明記している。

一方、社会福祉士養成は「スーパービジョン体制のなかで、学生は一人ではなく、スーパーバイザーと呼ばれる配属先での実習指導者、学校の教員によってサポートされて学ぶ。実習前や後には主として教員が、実習中には現場の実習指導者がスーパーバイザーとなる」と実習の指導について説明され、実習を遂行するために「困難な課題に向き合うため（スーパーバイザー）にサポートをしてもらい、必要な教育を臨機応変にしてもらうことができる。そのためにはスーパーバイザーとどのような関係を作ることがポイントとなり、実習生にとって大きな課題となる」と記され、実習での実習指導者の存在は大きい。

特にこれまで本学科が実習先へ送り出す学生について、実習施設の指導者がどの様に捉えているのか必ずしも明らかにしてこなかった。

そのため、本学科の学生が実習を依頼させて頂いている福祉実習施設へのアンケートをお願いし、実習における課題明らかにするとした。

2. 方法

今回のアンケートは、当初100施設への配布を考えていたが同一法人として、指導者が同一人物や、実習生受入れ方針に重なりが生じてしまう福祉実習施設については、調査対象から外す形をとった。以上のことから、調査対象の福祉実習施設は、80箇所80通の発送で実施した。

アンケート方法は、参考資料にある用紙と依頼文を副え無記名回答で同封した封筒返信で行った。回収期間を8月10日～9月31日とした。

表1 「回答者の属性」

1) 性別	
男性20名	女性25名
2) 年齢層	
20代5名	30代14名
40代7名	50代11名
60代1名	未記入2名
3) 就業年数	
1～5年未満12名	5年～10年未満11名
10年以上18名	未記入1名
4) 職種	
介護福祉士12名	指導員5名
責任者6名	管理者14名
未記入4名	
5) 指導者講習会（社会福祉士実習指導者講習会、介護福祉士実習指導者講習会どちらかのみ或いは、両方を含む）	
あり27名	なし15名

※実習指導者とは、指導者講習を修了していない方も含む

3. 倫理的配慮

本研究にあたり、倫理的配慮について敬心学園研究倫理審査特別委員会の審査の承認を得た（敬職19-01）。アンケート実施においては、研究協力施設及び研究協力者に書面と口頭で説明をし、同意を得た。

更に、東京都私立学校研究助成事業助成審査会への事前申請でもアンケートを実施させて頂く旨の内容を提出し了解を得ている。

4. 結果及び考察

アンケートの回収率は42通（52.5%）の5割を超え、データとして有効数が得られた。

今回のアンケートに答えている職種はまちまちであるが、実習指導者として独立した業務を行うことは無く、実習生を受容れる時は、職種が兼任して実習指導者として指導を行う。

アンケート調査の分析及び考察については、共同研究者が分担して実施した。

1. 実習指導者が実習生の実習指導が困難と感じる場面（松永）
2. 実習施設の指導者が実習生に期待すること（黒木）
3. 指導が困難と感じている学生への有効な指導（岩本）

4. 分析のまとめ（中島）

1. 実習指導者が実習生の実習指導が困難と感じる場面

本章では、実施したアンケート項目I「実習指導者が実習生の実習指導が困難と感じる場面」について明らかにし、考察を行なうことを目的とする。

(1) 分析方法

分析枠組みには、Steps for Coding and Theorization (SCAT) を用いた。

分析の過程は、SCATの分析過程を基本的に踏んだが、アンケートの自由記述の多くが箇条書きであったため、1つのテキストデータが小さく、文脈からの言い換え、概念化が難しいことが考えられた。そのため、福士ら（2011）の手法を採用して、以下のような手順で分析を進めた。

- (a) データ入力：アンケート自由記述のテキストデータをSCATフォームに入力。
- (b) グループ化：テキストデータごとに、類似したテキスト同士をまとめグループ化する。
- (c) 言い換え：グループ化ごとのテキストデータの脈を踏まえて他の語句に言い換える。
- (d) 概念化：グループ同士の関係から浮上して来る潜在的なテーマを概念化する。
- (e) ストーリーライン：すべてのデータを組み入れた概念化の全体像を文章化する。
- (f) 理論記述。

(2) 結果

<学生との意思疎通困難><指導への反発><社会的常識の欠如><実習に対する姿勢・態度の欠如><学習不足><基礎学力不足>が生成され、【関係性構築の困難】【実習の前提となる能力の未獲得】の概念が生成された。

以下、< >は言い換え、【 】は概念、斜体は原文データとする。

表2 「実習指導者が実習生の実習指導が困難と感じる場面」

【関係性構築の困難】	
コミュニケーションがとれない	意思疎通の困難
自分からほとんど話さない	
応答しない	
説明に対して反応が薄い	
自らの考えをあらわせない	
指導を受け入れない	指導への反発
助言をしても反発する	
否定的な指摘には気を使う	
他の価値観を受け入れない	
意欲がない	実習に対する姿勢・態度の欠如
やる気がみられない	
積極性が無い	
主体的でない	
目的がない	
学ぶ姿勢が無い	
指示をしても実行しない	
福祉に対しての志が希薄	
【実習の前提となる能力の未獲得】	
基礎学力不足	基礎的学力不足
言語力にばらつき	
文章力が無い	
マナーが備わっていない	社会的常識の欠如
社会的常識の欠如	
居眠りがある	
社会性が無い	
敬語が使えない	学習不足
知識修得としての学習が進んでいない	
記録への理解不足	
人権に対しての理解が低い	

(3) 考察

介護福祉実習指導者が指導困難と感じる場面として、まず<実習に対する姿勢・態度の欠如>がある。サボリ癖があり、職員の見えないところでサボっていたり、何も質問してこない。学ぶ姿勢が感じられない（やる気がない、親に言われてやっている等）の学生に指導するのは厳しく、排泄・入浴などプライバシーに関わるシーンを全くやる気のない学生に見学等してもらうのは、嫌な気持ちになる。主体的ではない、受け身である。何を目的として来たのか、その本意が伺われない。何を学びに来たのか問うて即答する学生は少ない。といった学生の実習姿勢、態度が要因で指導困難と感じると指導者は述べていた。

次に、<学習不足>では、単語としてはわかるが

意味や状態を聞いてみると答えられないことが見受けられます（認知症について聞くと出てこないなど）。実習ノートの記載内容が実習目標とかけ離れている時や、出来事をつらつらと書くためにコメントしにくい。人権についての理解が低い。という場面が挙げられていた。<基礎学力不足>の場面では、実習ノートの文章が、正しい文法でないなど、国語力に問題を感じることがあります。記録に関しては、文章力が一定レベル以下。文章力がなく、どの程度理解しているのかわからない場合。学生が言語力にばらつきがありますので、指導に悩みます。などが挙げられていた。

これらの場面の生じる要因として、学生が実習で学ぶために必要な基礎的な知識能力の欠如が考えられる。

次に、<学生との意思疎通困難>場面では、感想を聞いても、答えがない。思ったことなどをあまり言葉に出さない方は困難を感じることがあります。業務について説明しても、反応が薄い。返答がない。困っていることや質問を聞いたときに、「特にない」といわれた場合。などが挙げられた。

<指導への反発>では、自分の世界が確立されていて、他の価値観を受け入れられない場合。指摘に対して抵抗が強い。傷つきやすいとの理由で指導を受け入れることが難しい場合。自分の意見が強すぎて、支援方法に疑問を感じ、それを否定的に表現する。などが挙げられていた。

そして、<社会的常識の欠如>では、あいさつ等、社会に出るためのマナーが欠如している。家庭での躰によるものなのか、挨拶やマナーが備わっていないなどがあった。

<学生との意思疎通困難><指導への反発><社会的常識の欠如>という場面に指導者が遭遇すると、学生個人に合わせた指導や方法、今後の実習展開の検討が困難になり、学生の思いも理解できないことから相互交流が難しくなり、学ぶ、教えるための前提である人間関係の構築が困難となり【関係性構築の困難】が生じることが示唆された。

また、<実習に対する姿勢・態度の欠如><学習不足><基礎学力不足>が感じられる場面に遭遇すると、学生が【実習の前提となる能力の未獲得】のために、実習段階ごとに求められる到達目標や学習

内容の指導ができず、また修得が困難となることから実習指導への困難を感じる事が示唆される。

では、実習指導者が指導困難と感ずることについてどのように解決していけばよいのだろうか。まず、大切なことは、これは指導者の力量や能力に要因を求めめるのではなく、養成校の課題でもあるという認識を持つことであろう。

しかし、養成校では学生に対して、学内、学外問わず、熱心な指導や支援が行われていることは筆者が介護福祉士養成課程を持つ専門学校の教員へのアンケート結果から理解している。実習における学生の指導困難場面は、学校生活においても共通していることが多い。まずは、学校での課題を教員は指導者と共有することが大切である。そして、個々の学生に合わせた実習プログラムの検討や指導方法、教員との密な連絡など協働した実習での学びの支援が必要であろう。

(4) 結論

実習指導者が指導困難と感ずる要因として、【関係性構築の困難】【実習の前提となる能力の未獲得】が示唆された。指導困難の学生は、学校生活においても同様の課題を抱えている場合があり、学校での課題を教員は指導者と共有し、個々の学生に合わせた実習プログラムの検討や指導方法、教員との密な連絡など協働した実習での学びの支援が必要と言える。(松永)

2. 実習施設の指導者が実習生に期待すること

本章では、アンケート項目Ⅱ「学生にどの様な期待を持っていますか」について明らかにし、考察を行うことを目的とした。

当初、得られた回答を分析ツール「テキストマイニング」を用いて分析を行う予定であったがデータが不十分でありこの分析ツールにおいて有意性を見出せるような分析結果を得ることは出来なかった。そのため、ここでは言葉の出現頻度を多い順に「学び」「積極的」「姿勢」「気持ち」に関して、実習指導者が実習生に期待することの傾向を紹介していきたい。また、実習指導者の期待とその背景が伺えるため、文章の一部でなく、いただいた文章をそのままつけ加え紹介することにした。

(1) 「学び」出現頻度8回

「学び」という言葉の背景には、実習生に対し上手くやることを求めるのではなく、学びの機会として活かして何か有意義なことを得て欲しいという強い期待が伺えた。

以下、実習指導者のコメント：

「実習は学びの場なので、なぜ、と思ったことを上手く聞いて欲しい」

「社会科見学で構わないが自主性として何かを学びつかんで帰って行ってほしい。それが無理ならせめて何かしらの気づきがあって欲しい。」

「将来介護の職につくにあたり多くのことを学び、感じとって欲しい」

(2) 「積極的」出現頻度7回

「積極的」という言葉の背景には、「学び」と同じように、せっかくの機会を学生が意義あるものにして欲しいという期待が伺えた。また、実習生だからということで遠慮するのではなく、自ら学び取りに行くぐらいであって欲しい、将来の福祉現場の担い手となって欲しいし、そのようになるために必要なことは何かを実習現場で見つけてもらいたいという期待が感じられた。

「実習での失敗を恐れずに積極的、意欲的になってほしい」

「積極的に学ぶ姿、未来の介護福祉士としての活躍」

「積極的に参加したり、関わろうとする姿勢」

「実習先について感じたこと気がついたことを積極的にフィードバックしてほしい。(施設側の気づきになることが多々あるため)」

(3) 「姿勢」出現頻度6回

実習指導者が「姿勢」という言葉を用いる背景には、実習で経験を積む技術そのものよりも、目の前の利用者や学びの機会にどのように取り組むかと言う態度が大切であることを分かって欲しいという期待が伺えた。またその姿勢として、「謙虚さ」と「学び」を併せて表現されていた。

「実習中、分からないことがあって当たり前です。分からないことをそのままにせず、質問など聞いてきていただきたいです。個人差がありますが、学びの姿勢をみせていただきたいと思っています」

「謙虚さを学ぶ姿勢があること」

「謙虚な姿勢で実習に挑んで欲しい」

(4) 「気持ち」出現頻度 4 回

実習指導者が「気持ち」という言葉を用いる時に、「気持ちに寄り添う」「熱い気持ち」「相手の気持ち」「尊重する気持ち」というように、支援の対象者（利用者）に対して持って欲しい「気持ち」を表現していることが伺えた。

「支援を求めている方の気持ちに寄り添える人間であって欲しい」

「福祉の道を志したときの熱い気持ちをそのままに、自分自身に対しても希望と期待を持ち続けて欲しいです」

「相手の気持ちを思いやることができる人材になってほしいです」

「利用者を観察や分析の対象としてではなく、対等な一個人として尊重する態度や気持ちを身につけてほしい」

これと同様に別の言葉を用いて対象者に向けて持ってしてもらいたい気持ちは次のように表現されていた。

「人と関わる仕事に魅力を感じ、対象者に敬意をもって接していただくことを期待しています」

「子どもと楽しく関わろうと思っていてくれるか」

(5) 「人材」出現頻度 3 回

「人材」という言葉が用いられる時、近い将来の日本の福祉を担う存在としての期待が伺えた。

「介護を担う人材として、現場に出て働くようになってからも新しい技術、知識を学ぶ意欲を忘れないよう、常に初心を忘れないでほしいと思います。」

「介護に必要な知識や技術の習得は重要ですが、利用者や職員からのコミュニケーションを大切にできる人材の育成がより重要だと考えています。」

「社会で通用する人材となってほしい。」

「介護技術では一人ひとりの動作に根拠があることをしっかり学び、私達が長い年月で積み重ねてきたものをより早く取得し、さらなる技術の発展に貢献できるような人材になってもらえればと思います。」

今回紹介したこと以外でも多くの励ましと期待が述べられていて、次世代を育成したいという熱い想

いが感じられた。

(6) 「挨拶」出現頻度 3 回

「挨拶」という言葉が用いられる場合、「基本」「常識」「第一歩」という言葉が同時に用いられており、あたりまえのことが出来ていない学生へ「挨拶」の意義を伝え、苦言として用いられている傾向が見られた。

「挨拶や返事等基本的な部分がしっかり身につけていること。」

「挨拶がしっかりできる常識のある学生」

「初めての实習で緊張していると思いますが、笑顔で挨拶が信頼関係を築く第一歩なので、そこを意識しながら実習に臨んでほしいです」

(7) 考察

以上が、出現頻度が複数ある言葉であるが、これを全体の傾向として捉えると、「学び」「積極的」「姿勢」では実習が学生にとって意義ある機会となるよう願いながら指導にあたってきたという指導者の内面を垣間見ることが出来た。また、「気持ち」では実習生が同じ職種の同胞として育ち、同じように対象者を大切にする専門職者になって欲しいという期待が表れていた。続いて、「人材」では、実習に望む学生がやがて福祉の専門職者として成長し活躍することを強く願っている想いが感じ取られた。そして、技術や知識以上にそもそもの基本として実習生に対し望んでいることは、「挨拶」であることが分かった。

この章の最期に実習生への期待と実習指導者の覚悟が次の言葉に表現されていたので紹介することにする。「『実習』を退屈なものや面倒なものと考えずに、胸を躍らせて来て欲しいです。その期待にお応えする準備を整えてお待ちしております」。(黒木)

3. 指導が困難と感じている学生への有効な指導

本章では、アンケートⅢについて「指導が困難と感じている学生に、どの様な指導が有効と考えるか」について明らかにし、考察を行なうことを目的とする。

本章では、実施したアンケート項目Ⅲ「指導が困難と感じている学生に、どの様な指導が有効と考

ていますか（有効な指導とは）」について分析し、考察を行なうことを目的とした。

（１）分析方法

アンケートで回答して頂いた内容から多く使用されていた単語やその単語に準じる内容を中心に抽出しその代表的文言をカテゴライズした。さらに、複数回答者もいるため、指導者の回答には複数表記している場合も含まれている。

回答内容については、大枠で４つに分けられたため心理測定尺度集Ⅳ（学習観尺度 [植木、2002]）を参考に質問内容を設定した。

回答内容は、表の通り上部から順に回答内容をまとめた。その他については「指導経験がないため良い答えが見当たらない」など回答はしているが内容については質問項目に達していない回答は、「その他」にまとめさせて頂いた。

（２）結果

（a）「積極的なコミュニケーション」

回答内容の最も多く頂いた内容は、積極的なコミュニケーションであった。これは、実習生への指導として日頃から意識し指導者が学生時代の経験値から学生の馴染める環境と、積極的な関わりを行う事で、指導者と実習生との間にある信頼関係が構築されること、そして、ご利用者とのコミュニケーション作りに発展できると判断されていた。

（b）「丁寧なスーパービジョン」

回答者の意見には「実習に入る前のスーパービジョンが必要。福祉分野で頑張ろうとしている学生が少ない中、全員（施設実習希望者）を迎え入れたい。現場では実習生と指導者のマンツーマン指導。指導を受ける意味、スーパービジョンの意味を理解できるとアドバイスが「怒られている」ではなく、自分の糧になると思います」という回答などから個別に対応して行くことで学生がより充実した実習内容を展開できると判断していることが伺える。

（c）「事前学習の必要性」

回答者の意見として表 3（c）の具体的回答に「（実習先への）興味や関心の薄さを克服するためにも、自主的に事前学習をすることで社会資源への理解や実習先の役割、目的について理解することが出

来るため、事前学習をしてきてほしい」との回答があった。

単位取得のための実習先として捉えるのではなく、その施設のおかれている位置づけや福祉制度を理解してから制度的施設の必要性を理解できる実習になって欲しいという希望が伺える。

（d）「学校・教員との情報交換」

実習に際し、教員は基本的にどの福祉施設へ実習期間に応じて、巡回指導を目的として実習施設に伺うことが厚生労働省の規定となっている。また、養成校によっては年度初めや終わりなどに実習先との意見交換会を実施するところもあるため、実習に関する情報を話し合っている。その中で回答者からの意見としては「実習生だけでなく、（実習）担当の先生と連携してサポートする」と記入していることから、実習生を受入れることは、学校と施設の連携で成り立っていることを再認識して欲しいという要望が見え隠れしているように感じる。

表 3 「Ⅲ. 指導者が困難と感じる学生に、どの様な」指導が有効と考えていますか」

主な効果的指導	回答
(a) 「積極的なコミュニケーション」	20
(b) 「丁寧なスーパービジョン」	11
(C) 「事前学習の必要性」	6
(d) 「学校・教員との情報交換」	2
(e) 「その他」	2
(f) 「無回答」	1

調査結果から「指導困難」と思われる多様な学生（個別因子による様々な実習指導を要する学生）へのアプローチとして個々の学生の課題を教員は共有し、個々の学生に合わせた実習プログラムの検討や指導方法さらに教員との密な連絡を取り実習施設との協働した指導を行い学生が不利にならない実習展開が出来るように意識して行くことが必要であることが改めて見えた。

（３）考察

以上の回答から、回答者らによる意見は、学生への指導の中に福祉施設現場への就労への期待と先ずは、「これだけは理解して欲しい」という実習先の理解を求めていることがわかる。

実習は、学生のみでの展開ではなく実習先指導者、職員、利用者とその家族など施設を取り巻く各々の職員がチームになって行われる。さらに、その施設を支える地域住民、出入り業者など間接的に展開されていることを知ることで実習先のあり方にも線（知識）から面（技術）へ面から立体（施設理解）へと理解することが大切であると確認できた。

荒木ら（2014）⁴⁾によると「現場実習のもっとも貴重な体験は利用者と接することにある。学生はその関わりのなかで、学校で学んだ知識・技術を自分で確かめそして試みながら戸惑い、不安のなかで実習を進め、自信と技術を身につけていく。

一方、厳しい現実を見せつけられる場でもある。そして実習終了後に、前述している学内での学びをさらに深めていくことにより、介護に対する意識の高揚にも繋がっていく。そのためにも、現場実習を円滑に進めるためには、養成校と施設実習指導者との連携が欠かせないのである」と述べている。

学生への指導は、学生の情報共有を教員と指導者で密に行い、実習目標を立てる。そして、実習内容を焦点化し、その上で実習を行う意義がみえてくる。やがて実習内容への興味が湧いてくるのが大切であると示唆された。

（4）結論

今回アンケート項目である「学生への有効な指導とは」についての回答では指導者の学生に対する意識が、来客を招き入れるように丁寧にそして親切に指導を行っているように伺えた。

荒木ら（2007）⁵⁾は「最近の学生には、自己の確立をしていない人間性の未熟な学生も多いと感じている。このため、教育の基本姿勢に、人間としての人格の育成という要素も入れながら、学生には、この一年を現任基準期間と位置づけて教育している」と述べている。さらに「自己中心的な志向が先に出て、行動そのものが大なり小なり『群れ』化し、自分自身が見えずに、同時に人からどのように見られているかも振りかえようとしなない。かといって、自分を『群れ』に流されていると認識しているわけでもなく、その時々で都合よく自己防衛に走る傾向にある。このような学生を、実習と称し、介護現場に送り出す後ろめたさを感じる学生も少なくなく、指

導者には、実習態度や意欲、姿勢等で指導上、苦慮しているケースも年々多くなってきている。つまり、人間的な成長に個人差が大きくなってきているともいえる」と述べている。

このことは、本学科も同様であり、指導上苦慮する学生をどのように指導し、実習に行かせるかについて、課題となっている。

しかしながら、学生の学ぶ姿勢は、指導者の一言や利用者とのコミュニケーション教員の指導により変化していく可能性がある。つまりは、一概に苦慮する学生の日々授業態度と怠惰な実習態度は、十羽一絡げにすることはできない。その逆も然りである。

冒頭で述べたように、実践現場をマネジメントできるリーダーを育成することを本学科の理念として創設されている。

しかし学生によっては、試金石の如く、授業態度がよくない学生であっても、実習先で得られた経験から学業に一気に目覚める場合もある。

今回のアンケートの回答内容から、学生と施設先での指導方法の中に、学生に対し可能性を信じ期待を持って、丁寧な指導をしていることが理解できた。

それは、やがて福祉業界へ向かい入れる福祉職として、学生への期待した指導であることが示唆された。（岩本）

表4 「福祉実習施設先に送ったアンケート用紙」

平成 30 年 8 月 9 日

介護福祉士実習及び社会福祉士実習に関するアンケート

お手数をおかけ致しますが下記の質問項目にお答え下さい。宜しくお願い致します。

協力者の属性

性別	男性 ・ 女性	年齢	歳	貴施設での就業年数	年
職種	介護福祉士 ・ 社会福祉士 ・ その他()				
実習指導者講習会修了	あり ・ なし	ありの方 ()年修了			
職業	介護 ・ 指導員 ・ 責任者 ・ 管理者 ・ その他()				

I. 学生の指導が困難と感じるのは、どのような場合ですか

II. 学生にどのような期待を持っていますか

III. 指導が困難と感じている学生に、どのような指導が有効と考えていますか

ご協力ありがとうございました

5. まとめ

専門学校においては、「学生をどのように指導し実習に向かわせるか」と指導に苦慮することが少なくない現状である。これは、実習において「関係性構築の困難」や「実習の前提となる能力の未獲得」から指導困難を生じさせる原因となっている。

しかし、そのような現状においても、福祉実習施設の指導者は、「実習が意義あるもの」「学生が福祉の専門職者として成長し活躍すること」「社会人マナーを身につける」を期待し実習を行っていただいている。

以上について「指導困難」と思われる多様な学生が実習において指導者からの指導・助言や利用者との関わりから、福祉への興味関心が強まり、行動変容がみられることがあり、更に学生生活においても学習意欲・取り組みの姿勢が明らかに変容することがあることから実証されたものと考えられる。

よって、実習指導者と教員が連携し、指導教育の環境を整えていくことの必要性を再認識した。(中島)

謝 辞

お忙しい中、アンケートをお送りさせて頂いた全ての協力依頼者並びに共にアンケートへの真摯な回答を下された協力依頼者の方々に、ここでお礼を申し上げます。

【引用文献】

- 1). 日本福祉専門学校 (2014)『日本福祉のあゆみ～30年を振り返って～』日本福祉教育専門学校 P90

- 2). 社会福祉辞典編集委員会 (2002)『社会福祉辞典』大月書店
- 3). 住居広士監修笠原、國定、日高、吉田編 (2009)『介護福祉用語辞典』P125。ミネルヴァ書房
- 4). 荒木、櫻井、松田 (2007)『介護実習の視点1』羽陽学園短期大学紀要。第8巻 (1) P53-68
- 5). 荒木、伊藤、松田 (2014)『介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携』(1) 羽陽学園短期大学紀要 P425-431

【参考文献】

1. 宮本、梶尾、山村編 (2016)『社会調査の基礎』第3版 弘文堂
2. 橋本、柿木ら (2017)『相談援助実習評価の現状に見る効果的な実習教育に向けた課題』関西福祉科学大学 P39-52
3. 原田、高島、浦 (2010)『分野における現場実習に関する現状と課題』長崎国際大学 (10) P187-196
4. 伊藤、矢羽、丸紀ら (2009)『施設介護実習が介護福祉士を目指す学生に与える影響』信州短期大学紀要 (20) P75-78
5. 堀、松井編 (2001)『心理測定尺度集I』サイエンス社
6. 福土元春、名郷直樹 (2011)『指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない—指導医講習会における指導医のニーズ調査から—』医学教育42 (2)
7. 堀、松井編 (2001)『心理測定尺度集III』サイエンス社
8. 堀監修、櫻井・松井編 (2001)『心理測定尺度集IV』サイエンス社
9. 柳澤孝主 (2007)『臨床に必要な人間関係学』P121。弘文堂

受付日：2019年10月12日